

星空市場

すばる望遠鏡が建設されて活躍を始めているが、90年前に台湾の最高峰に天文観測所を作ろうという計画があり、60年前には具体化の一步があったことを示す文献がある。

新高山天文台

天文台を建設するに際し、最も理想的な地点は米国カリフォルニア州南西部、パサディナの近くのウイリソン天文台（標高 1,742 m）のように晴天日数の多い乾燥した高山の上である。ここは人里を遠く離れ、天体観測に不利な浮遊物：塵埃、煙霧は皆無に等しい。むろん立派な自動車道路がある。

廿世紀の初頭、日本の天文学界で新高山に天文台を建設する構想があったので、明治 42 年（1909）、日本内地から東京帝大理学部 of 若い学者：一戸直蔵、小倉伸吉両氏が台湾側の台北測候所（台湾総督府気象台の前身）技手・大隈鴻一と総督府殖産局雇・佐々木舜一両氏の案内のもとで新高山に登って実地調査をした。

彼らはカメラの外に各種の測器を携帯し、同年 10 月に 10 日間かかって新高山の北山の頂上に到着した。北山の標高：3,850 m は同山系の主山標高：3,950 m より 100 m 低い。彼らはそこで一週間キャンプをしていろいろな調査や気象観測や測量を行った。しかし交通や経費などを含む当時の実情によってこのプランは実現されなかった。

これより 33 年経った昭和 17 年（1942）に新高山測候所を創設するとき、台湾総督府気象台技師 窪川一雄氏の熱心な推進によってこの建設が実現される運びとなり建設の土台まで仕上げた。天文学者であった窪川氏は世界でも最も標高の高いこの天文台に大きな期待をかけていた。ここに太陽分光儀、紫外線測定儀、12 吋廻光赤道儀などを設置するプランであった。

惜しむらくは窪川氏の病没と戦局の悪化によってこの工事は途中で廃止になり、そして歴史の彼方へ消えてしまった。筆者が昭和 19 年（1944）に新高山測候所で勤務したときに見たこの土台と言うのは、風力塔の南側にあつて地上約 50 cm、直径約 4 m の円形をなし、土台の上より出ている錆びた鉄筋が印象的であった。

『窪川一雄氏（1903-1943）は 1926 年東京帝国大学で天文学を修業し、天文の論文を数多く発表した。渡台してから民間組織である「台湾天体観測同好会」の会長を兼任し、測候技術官養成所の天文学講師をも兼任されていた。窪川先生の講義を受けた筆者の記憶に次のエピソードがあった。「宇宙間には無限小と無限大の世界がある」、と前置きしてから「一本の羊羹をいくら食べても無くならない手がある」と話を続けた。時間をちょっと置いてからこう説明した；半分だけ食べ、次は残りの半分を、この次もまた同様にして食べたらよい。最終的には無限小の範疇に入るがゼロになることは無い。」な～る程である。』

窪川先生の病没後、ご遺族の寄贈による「窪川文庫」（天文書籍の文庫）が終戦の混乱によって散逸したものを、蔡章献氏（元・台北市天文台長）の熱心な搜索によって僅か数冊（英文、仏語の原書も含む）が回収され、今も同天文台に保存されている。

周 明德（米国在住）

上の文は拙著「夕日無限好」の第 51 頁にある「新高山天文台」に若干の史実を追加したものです。この拙著は平成 12 年米国の現住所で発行した私家版の非売品です。天文学者の海野和三郎氏が「天文月報」に転載して下さいとのことですが無論喜んで提供致します。

なお転載されるときに貴地の事情によって取捨選択や追加されたい事情がありますればご遠慮なくお取り計らいして下さい。転載の一部を送ってくだされば幸甚のいたりです。取りあえず返事まで。寒さは当分の間まだまだ続きましょう。くれぐれもお大事になさいます。サヨナラ。

窪川登美子さまへ

晩・周 明德 謹上

Ellicott City, USA

\* 以上は窪川登美子さんと海野和三郎先生のご尽力により掲載出来ることに成りました。御礼申し上げます。

(天文月報編集部)